きのこ雲のそばで

岩田京子
東中野一丁目

私にとっての戦後とは、私の一生の大部分である。敗戦のとき八歳、国民学校二年生だった。五人兄弟だったが、敗戦直前には、①私と弟と母方の祖母が長崎県の父方の祖父母宅に縁故疎開、②姉は長野県の温泉に学童疎開、③母と嬰児の妹は伊豆に縁故疎開しており、④東中野の家を父と兄が守り、家族は四散していた。昭和二〇年五月二五日の空襲で、東京の家は全焼した。

私が疎開したのは、島原半島の、いまも過疎地の町だが、その頃、浜から突き出た山では発破の音が終日響き、砲台を築いているという噂だった。砂浜には横穴が掘られ、松の木の幹に魚の背骨状の溝を刻み、空きカンを結び付けて松ヤニを取り、おばさんたちは集められて竹槍訓練をした。佐世保への飛行路に当たるのか、敵機の編隊の銀翼を頭上に見ることが多くなった。ゆるい岩山に横穴の大防空壕が掘られ、年寄りと子供は警報中、そこに避難した。何の気紛れか、県道や砂浜が機銃掃射に遭ったこともあり、下校中だった私は知らない農家に飛び込んだ。野良着のおばさんが土間にいて、私に「隠れんね！」と叫び、自分も水がめの陰でナンマンダブ、ナンマンダブと唱えた。

祖父は役所を退職後、農業をしていたが、寄り合い所帯を抱え、地区会長として、地域の人を集めて「一つ、この聖戦を戦い抜きます」などと唱和させて、当時は厳しい人だった。祖父にとって一番辛かったのは、愛犬の供出だったろう。自分の箸で御飯を食べさせていた座敷犬を抱いて、砂浜に供出に行った。犬が撲殺されるのは見ないで帰ってきた。遠くの畑に早朝から畑仕事に出て、犬の供出に行くヒマもなかった近所の人が、「犬ば出さんでん良かったと（犬は出さなくても良かったのに）」と祖父に同情するのを後で聞いた。町から更に山の中に祖母と荷物は再疎開した。私も芋づるやどんぐりを採って、干した。

昭和二〇年八月九日、つるべ井戸の向こうの晴れ渡った長崎市上空にあらわれたキノコ雲をあっけにとられて眺めた。その直前、白い強烈な閃光が空を数回走り、まわりの事物がくっき

りと浮かび上がった。私は急に視力が良くなったのかと喜んだ。少し遅れて長崎方面で大音響が起こったと思う。「工場ん爆発したと」と誰かが後で言った。市内に親しい身内はいなかったが、私を可愛がってくれた近所の女学生のマサコさんが市内に手伝いに出かけていて、この日以後、永久に行方不明になった。市の近郊で郵便局員をしていた知人が来て、祖父に、ちょうど札束を数えていたときに爆風が来て、窓ガラスと手の中の札束が瞬時に吹き飛び、一枚も戻ってこなかった話を繰り返した。小二の私の頭の中で、原爆は吹き飛んだ札束と結びつき、もっと豊富で正確な知識は、後年、時間をかけて学んだ。敗戦の玉音放送は聞いていない。当時、うちのラジオの調子は悪かった。数日後、ポツダム宣言受諾を告げる、たしか紙一枚だけの新聞を読んでいる叔母に「おどみゃ何ばすれば良かと（私は何をすれば良いの）？」と聞くと、まあ、勉強することだという返事だった。そげんやさしかこつ（そんな簡単なこと）とその時は思ったが、一生卒業できない学生のように、勉強のことでは今も苦労している。

終戦直後に帰京した母は、疲れや栄養不良も重なって十月三日に三三歳で胆のう炎で死亡した。私はそばにいなかった。新しい若い母を迎えて、家庭生活をみんなで再建し、弟も一人増えたのは戦後の物語だ。

昭和二二年、東京に戻っていた私も、中野区立桃園第三小学校四年生として、新憲法施行を祝う旗行列に加わった。中野駅南口まで露店の並ぶ大通りを行き、現在の丸井の裏通りを折り返した。立ち止まって列を眺める人も、無関心に通り過ぎる人もいた。

戦後とは、「与えられた」民主主義が崩れてきた過程だと思う。従って敗戦直後、日本は最も民主的だったことになる。この卓見を、私は数年前に新聞で読んだが、原資料が見つからない。テレビもラジオの民間放送もなかった小学生の頃、マッカーサー元帥が年頭のメッセージで、「日本は東洋のスイスであれ」と述べた。元旦ではなく、こたつの大掃除をしながら大みそかに聞いた記憶がある。中学に入った年、朝鮮戦争が起き、警察予備隊ができた。昭和二八年、都立西高に入学した。「メーデーに参加するな」と、朝礼で校長が訓示した。昭和二九年に自衛隊が発足し、アメリカ合衆国の日本への期待は変節した。日本は、その都度、その変節に追従した。沖縄以外の日本は地上戦を経験しなかったから、自分の住む土地で犯され、家族が直接殺された経験をしていない。日本の反戦意識は、つまるところ「あの人は帰って来なかった」式の厭戦思想だから不徹底だという指摘を、正しいと思う。大学の四年間、全学連のデモにマジメに参加した。警職法反対。勤務評定反対。安保反対。けれども、六〇年安保デモには、卒業し、就職した年だったので参加しなかった。

一九六六年から二年間、アメリカ合衆国の大学院に留学した。モンロー主義についても学んだ。ベトナム戦争反対を言う私に「第二次世界大戦の始まった時、国内には戦争不介入を唱える幅広い反戦の動きがあったのに、真珠湾奇襲攻撃で、世論が参戦に統一されてしまった」とアメリカ人の級友が反論した。一九三一年の満州事変、そして私の生まれた一九三七年に、宣戦の布告もなく始まった日中戦争から長く続いた戦いの帰結、ポツダム宣言の遅すぎた受諾の帰結としての被爆という観点も学んだ。当時、アメリカはベトナム戦争の交戦国なのに、反戦運動も行われていたことに、懐の深さを感じた。日本の昭和末期のように自粛一辺倒にならない多様性のなかに、今もアメリカの健全なバランス感覚をみる。ただ、日本とアメリカの新聞から得るベトナム戦争の情報はひどく違っていた。

こどもの頃、日露戦争と聞くと、ひいおじいさんたちが旧式の鉄砲で戦っているセピア色の「カンケイない」イメージが湧いた。一九四五年の敗戦は、今の小学生にとって、それよりも遠いできごとだ。時間の経過は歴史的事実を消せないから、戦後は形式的には永久に続く。けれども、朝鮮戦争・ベトナム戦争・湾岸戦争などの戦後と重ねて見つめ続けない限り、また日本人以外の個人に対しても戦争被害への金銭的補償をしない限り、「日本だけの戦後」は空洞化していくだろう。

校庭の奉安殿まで級友の列を引率して、「止マレ。気ヲツケ。礼!!」と号令していた元軍国少女は平和少女になり、今年五五歳。反戦詩を書いても迫害されないから、パワフルな反戦詩が書けない。むずかしい時代だ。この秋、PKO協力法によって自衛隊員がカンボジアに派遣された。「その時、オバアサンたちは何をしていたの?」と、あとで、若いひとから聞かれそうで、怖い。

「思想の科学」一九九二年十一月号に発表済